

日中韓3カ国の農業政策研究所による 合同セミナーの概要

千葉 修

農林水産政策研究所は、諸外国との研究交流の一環として、中国農業科学院農業経済研究所（CAAS）および韓国農村経済研究院（KREI）と連携して、3機関で「北東アジア農政研究フォーラム」を設立し、研究協力を行うことについて基本的に合意をした。本合意に基づく設立記念式典と第1回セミナーが、去る10月28日に韓国ソウルで開催された。その結果を以下に簡単に紹介したい。



1. 北東アジア農政研究フォーラム（Forum for Agricultural Policy Research in North East Asia）の概要

当フォーラムは、次の事業を行うこととしている。

- ・学術資料、出版物および情報の相互交換
- ・本フォーラムのホームページの開設および管理・運営
- ・関連研究会、セミナー等の共同開催
- ・共通関心分野・課題の発掘および研究推進

このうちホームページは、当面KREIが中心となって開設され、3研究所にリンクが張られることになった（<http://www.fanea.org/>、英・日・中・韓の4カ国語）。

また、セミナーは第2回（2004年）が中国、第3回（2005年）が日本で開催される予定である。

2. 第1回セミナーの概要

参加者は、日本から、高野駐韓国日本大使（式典のみ）、西尾農林水産政策研究所所長ほか研究員5名（會田・香月・小野・小林・千葉）、中国からチェン・クミン CAAS所長ほか10名、韓国からイ・ジョンファン KREI院長ほか110名、合計約130名にのぼった。設立記念式典に続き、「北東アジア諸国の農業協力 その機会と展望」を統一テーマとして、三つのセッションで日中韓3カ国が報告・コメント・討論を行った。各セッションの報告テーマと報告者等を以下に示す。

第1セッション「北東アジアにおける農業及び農産物貿易の構造の現状と展望」

座長：西尾健（農林水産政策研究所）

第1報告「日中韓の農業構造：地域的農業協力の可能性」 オ・ミヨングン（KREI）

第2報告「日中韓の農業経済学の協力の選択：農産物流通機構の革新」

昊秀媛（ウ・シウウェン）（中国吉林省農村経済情報センター）

第3報告「日中韓野菜貿易の現状と展望」 小林茂典（農林水産政策研究所）

日本側コメンテーター：香月敏孝（農林水産政策研究所）

第2セッション「WTO・DDA（ドーハ開発アジェンダ）以後の北東アジア農業の展望」

座長：ホ・ギルヘン（KREI）

第1報告「DDA後の中国の農産物貿易」 劉小和（リウ・シャオヘ）（CAAS）

第2報告「DDA後の日本農業の見通し

2000年農業センサスによる現状と傾向」

小野智昭（農林水産政策研究所）

第3報告「DDA後の韓国農業の見通し

農産物市場開放が韓国農村経済に及ぼす影響」

ソ・ジンキヨ（KREI）

日本側コメンテーター：會田陽久（農林水産政策研究所）

第3セッション「北東アジアにおける農政研究の協力の強化方策」

座長：錢克明（チェン・クミン）（CAAS）

第1報告「中国・韓国・日本間の農業経済協力研究の方針」

薛桂霞（シュー・グイシャ）（CAAS）

第2報告「農林水産政策研究所の研究協力の概要」 千葉修（農林水産政策研究所）

第3報告「北東アジアにおける農業研究協力の必要性とその内容」

イ・ドンピル（KREI）

3. 農林水産政策研究所側からの報告

各国の報告・コメント・質疑とも、自国語を用いて（同時通訳）行われた。資料については英語と自国語で提示された。日本の3報告を簡単に紹介してみる。

第1セッションの小林報告では、日本の野菜輸入が1990年代以降、品目の多様化を伴って量的に増大し、輸入相手先の中国への集中度が急激に高まり、韓国からの野菜輸入は一部品目に特化している実態を分析した。さらに日本の野菜輸入増大の背景の一つである、野菜需要の多様化について考察した。

第2セッションの小野報告では、90年代以降の日本農業の構造変化を、農産物価格の低下のもとでの、経営面積拡大や複合化、野菜作等での環境保全型農業の進展として特徴づけた。センサスによる2010年の予測では、主業農家数は政策の目標値に達せず、また耕作放棄地が拡大するとの見込みを示した。

第3セッションの千葉報告では、農林水産政策研究所における海外からの研究員の受け入れ、国際会合・研究への参加、KREIとの共同調査、特別研究会での中国からの報告等の状況を説明した。

ちなみに、小林報告・小野報告は、それぞれ『農林水産政策研究所レビュー』の既発表論考（小林茂典「野菜の輸入動向と輸入野菜流通の特徴」（No.1, 2001年9月）、小野智昭「農地利用の構造的变化」（No.6, 2002年12月）、橋詰登「農家階層変動の特徴と要因」（同上））を手直したもの、また千葉報告はPRIMAFF Annual Report 2002から抜粋・再構成したものであり、詳細はそちらを参照していただきたい。

他の報告・コメントについては原則的に割愛するが、一点だけ紹介すると、質疑の中で、日本の食品残留農薬の基準は国際基準より厳しく、貿易抑制的であるとのコメント（中国）があり、これに対し日本側から、日本の基準は国際基準に合致していると反論する場面があった。

セミナー全体の日程が1日で報告が9人、コメントが延べ12人という濃密ぶりであった半面、討論時間が不足気味となり、各セッションとも結論を導くまでには至らず、やや消化不良の感もあった。が、これは第1回目のセミナーで相互に不慣れという事情からして、やむを得ないことであろう。

日中韓の農業の国際関係が深まる中、今回の研究交流により、相互の農業・食料・農村問題のあり方を比較検討する機会を与えられたことは大変貴重であった。また、29, 30日には、韓国有数の良質米生産地帯たるイチョン（利川）市における農協による環境保全的な米栽培、あるいは農家の大規模な花き栽培への取組みについて、三国合同で視察したところであるが、ここからも有意義な知見が得られた。なお最後に、今回ホスト役を務めた韓国農村経済研究院の、セミナー出席者に対する行き届いた配慮ぶりには、参加者一同、感心させられること多かったことを付け加えておく。